

□ 住宅設計

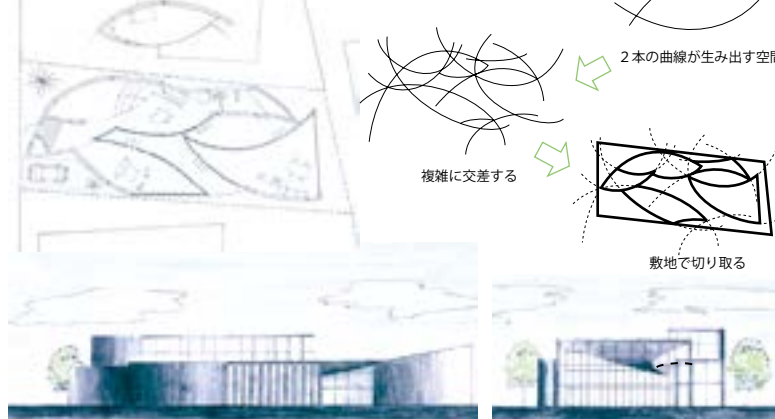


Leaf House

神原亮一



唐湊という地域は傾斜があり敷地からの景観が非常に良い。この特色を住宅に取り入れることを考えた際に内壁のほとんどをガラス張りすることで内部空間が連続性のある一つの大きな空間となり、住宅内どこにいてもその景観を楽しめるものにした。



△な家

浜岡和史



人通りが少なく、住宅が密集している上町。そこに家を建てるには、外に開かず、内に開いた住宅の設計がふさわしいと考えた。そのために、三角形の外壁を用いることによって、壁の傾斜によって生まれる境界の変化、多面からの内部への採光などの内部空間の多様性・非日常化を追求した住宅を設計した。



□ まちなかの大学サテライト



ミチビク窓

西園誠



窓から漏れる明かりや光景により地域の人を中へと導く必要な導線を作った。単にボリュームがあるのではなく、それを区切る事により背景が視界に入り、視線の先に敷地内外の豊かな風景が入るようにした。



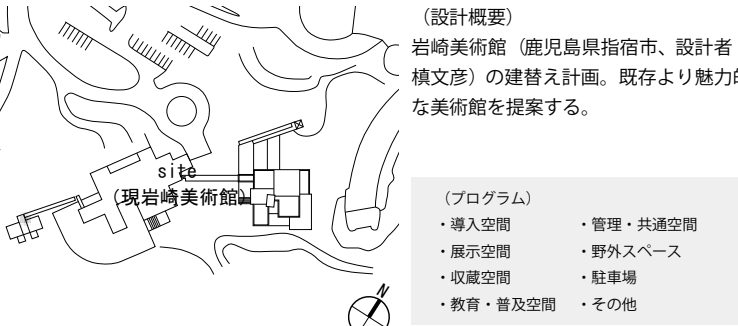
walls

東佑二郎

敷地条件から、裏路地から人を引き込むように4枚の壁を配置する。その壁によってできた異なる3つの空間を導線が貫く。歩く人は壁を抜けるたびに多様な空間を楽しむことができる。学生の学ぶ姿も作品であり、それらをガラスで仕切ることによってショーケースのように見立てた。

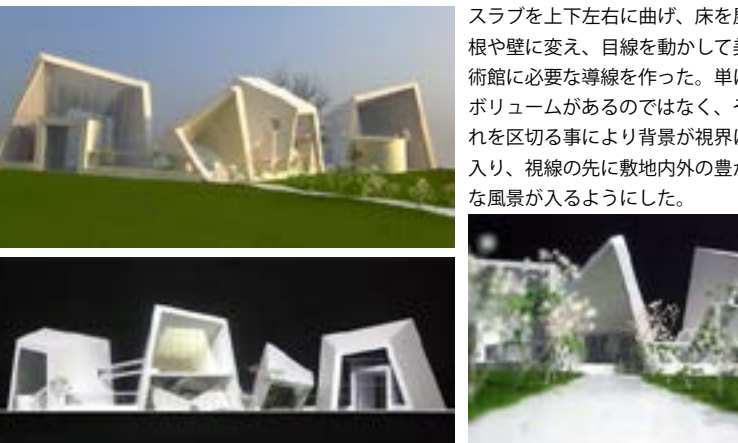


□ 「美術館」



single stroke

梶原好紘



スラブを上下左右に曲げ、床を屋根や壁に変え、視線を動かして美術館に必要な導線を作った。単にボリュームがあるのではなく、それを区切る事により背景が視界に入り、視線の先に敷地内外の豊かな風景が入るようにした。



路地裏美術館

武矢直子



路地裏をコンセプトにして設計した。展示方法は室内展示と路地を利用した室外展示である。路地の隙間から海が見え、展示の一つとして、出来るだけ座り心地の良いイスを作ることを心がけた。



□ 「座る」のデザイン



座・三角

大河内恵美



4枚のダンボールを三角形を利用して、組み合わせることで、ユニークな形態のイスを広場に散在させることで、開放とした大学内の広場を和らげようと試みた。また、4枚の板の状態から簡単に組み立てることが出来るので、持ち運び・収納も容易に出来る。

フィット

大野麻衣子



ダンボールを使用しなければならぬという条件の中でも、ダンボールをコイル状にして、クッションのようにしたり背面をカーブさせたり、出来るだけ座り心地の良いイスを作ることを心がけた。

ちょうど良い高さ

住田良平



一人ではなく、大勢が一度に座れる空間を制作した。また、座面上に多様な大きさ・形状の穴を三箇所開け、一人で座ったり、向かい合ってカップルで座ったりと、一人ひとりの状況に適した『座る』空間を提供する。

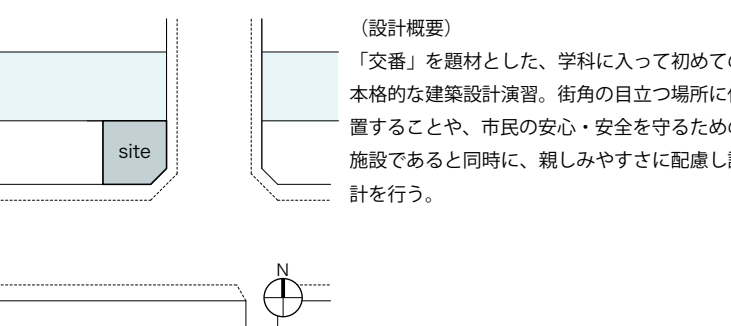
目を見て話すイス

久保田涼子



座る空間となるパーツが細かく分かれていて、様々な形態のイスを作ることができる。また、座面が取り外せて、どこにでも付けられるようになっているため、好きな角の、好きな高さの場所に座ることができる。

□ 橋詰の交番



S-curve

木村直樹



交番を設計するにあたって、意識したのは「つながり」である。「人と人とのつながり」と「空間のつながり」を考えたと、イメージしたのは波形。そこで一連の波形プレートを考え、そこに切り込みを入れることで様々な空間を生み出し、内外を問わず、つながりを感じることが出来る建物を目指した。

大きな屋根の木の下で

住田良平



ボリューム構成を従来の建物と上下入れ替えることによって、この形が生まれた。そして、敷地周辺に立ち並ぶ木々から『木』を連想し、木の性質である『生き物を集める』ということや、この建物の外部空間で、『人々が集まって、交流する』ということに繋げて設計した。

POLICE in POLICE

橋口由布子

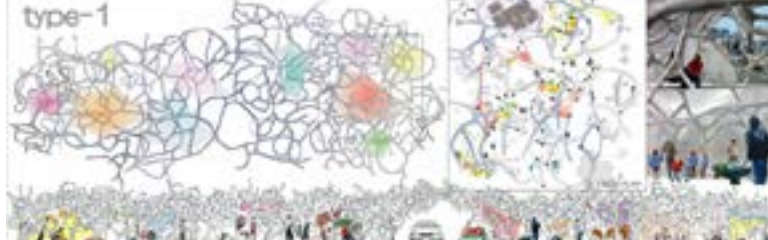


CUBE

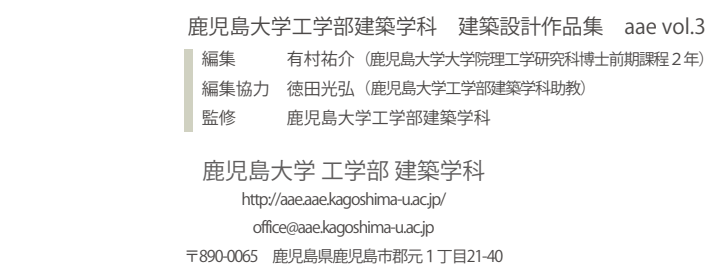
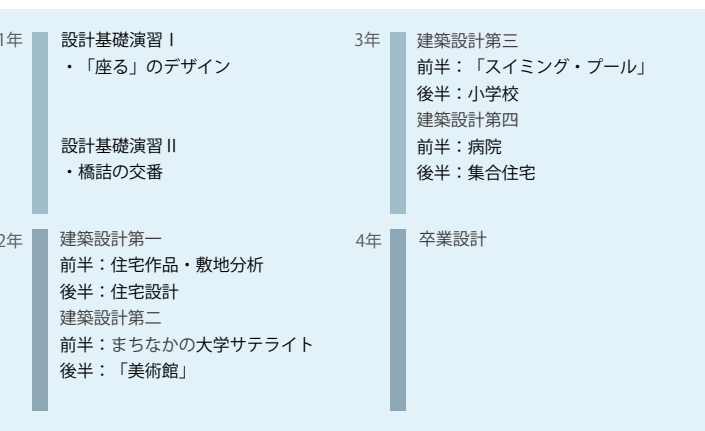
由村未来



暗いイメージのある交番に、光を取り入れることを中心に考えて設計を行った。それぞれ違う窓をもった立方体を組み合わせることによって、部屋によって違う形の光が入るようにした。段差をつけて組み合わせたり、一階と二階をずらして組み合わせたりすることで、中から見ても外から見ても面白い空間になり地域の人々のランドマークの役割も果たす。



2007年度 建築設計演習カリキュラム

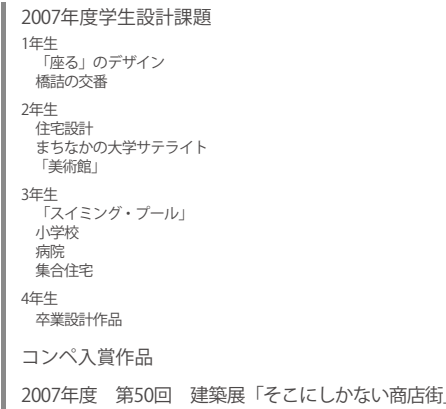


aae vol.3

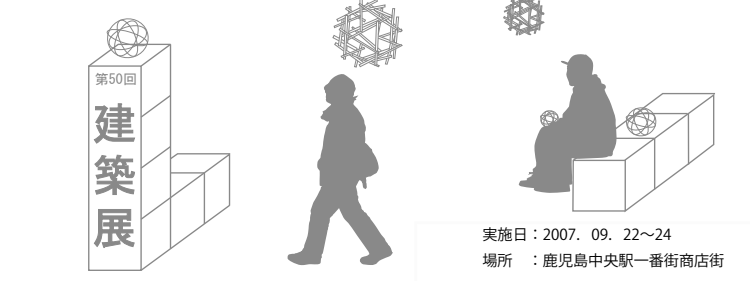
Dept. of Architecture and Architectural Engineering
Faculty of Engineering
Kagoshima University



鹿児島大学工学部建築学科 建築設計作品集



そこにしかない商店街



建築展後述 一番街商店街振興組合 理事長 庵下龍馬

建築展が一番街に与えた影響は大きい。一番街の意識改革の促進ともなった。学生と取り組む事業は若い人の発想が一番街に取り入れる良い機会であり、建築展はそのきっかけとなってくれた。客層の年齢が高い一番街でこれらの客層である若年層を呼び込む良い参考になった。これからも一番街は学生とのタイアップをどんどんやって行きたいと考えている。

建築展実行委員長 市村良平

平日頃出来ないことをしようと思死だった。出来上がったものは「建築」という枠組みの真ん中を突いているものではないと思う。しかし、自分が建築展から得たものは大きいと感じる。今回、一緒に建築展を行ってくださった一番街商店街の皆様、暖かい理解と支援をしてくださった各企業の皆様、ご来場して下さった皆様、このような貴重な経験をさせて頂き誠にありがとうございました。

Connect Cube

単体で見れば単純な立方体であるが数が増えれば変幻自在となり様々な形を作り、通りへ溶け込んでいく。それはベンチとなり、お店のショーケースとなり、ギャラリーのバレルとなり・・・。Cubeは柔軟に対応し、通りに溶け込み、人やモノの流れによりみを作る。



鹿児島大学建築学科では、学生の自主企画として「建築展」を行うことを恒例としている。学生にとっては社会との接点であり、「課外授業」のような役割を担っている。第50回を迎える今回は「地域密着」を考え、鹿児島中央駅前一番街商店街で『そこにしかない商店街』を提案した。数年前までの建築展は展示型であったが近年参加型へと移り変わり、来てくれた人々に1/1のスケールの空間を肌で感じてもらうようになった。商店街は流動性が前提にあって形成される。今回の提案ではその「流れ」に着目して、その中にギャラリー要素などを取り込むことでちょっと変わった商店街像が描けないか考えた。アーケードの天井部分、アーケードの下、空き店舗の三要素に分けて企画をした。

Tensional+Integrity

Tensegrityとはバックミンスター・フラーと彫刻家ケネス＝スネルソンにより生み出された概念であり、tensional(引張)とintegrity(完結性)の造語である。Tensegrityの中で発生するすべてのことの中で循環し完結するのである。一つが壊れると全てがダメになってしまうこと。まるで人間のネットワークのようにTensegrityは構築され広がっていく。



LINK

人のながれ。時間のながれ。もののながれ。『ながれ』にもいろいろある。しかし、すべてLINKしている。点から線が生まれ。線が集って面になる。この流れは通りに宿り、新たな形を空き店舗に与えていく。一番街にできたものは異空間を作り出し異質なギャラリー空間となった。



まちの教会 佐藤千草

街の中の小さな教会。商店街の隙間に、機能のレイヤ(層)と壁厚の動きによって、通り抜ける人と光の関係が常に変化する空間が生まれます。街に、そして多くの人々に開くことができるなら、それは優しいまちのたまり場であり、教会の本来の姿です。

路地のそら 清野正司

名山町3番街区の特徴である路地空間を保全するとともに、新たな路地空間を提案する。STEP1空家・空地の活用、STEP2新たな建物の挿入によって現在の路地空間に新たな魅力プラス、未来に残していく。

ソトウチ 田中文恵

袋小路が多く、寂れていく郊外住宅地に、境界のない曖昧な壁を用いてソトとウチのある家たちをつくり出す。ときには、袋小路で生活したり、ときには、壁を共有し合ったり、風景として暮らしを取り込みながら暮らす家たちである。

メントモリ 富山晃一

社会は変化し続け、建築は浪費されてしまっている。一方、生物は変化し続ける環境に適応するため、「死」を発明し「生」の更新を可能にした。アポトーシス(自死)する建築は、社会の変化を吸収し生き続ける。

そこに見えるもの 長谷部裕子

遺族が故人との別れを存分にでき、気持ちを前向きにできる火葬場を提案する。施設は遺族部門、別れの場、管理部門に分棟する。火葬炉を丘に埋め、シンボルである煙突から煙を出すことで遺族に風景を心に焼き付ける。

Duty Free Terminal 福元美紗

水辺空間に新しい流れを生み出すためにマスタープランを掲げ鴨池の海岸部を一体的に計画する。ターミナルに挿入されたフェリーの中は歩行空間と市場空間となり、Duty Free Terminalは、大隅・周辺の生活・海岸とをつなぐ役割を果たす。

□「スイミング・プール」

(設計概要) 機能性・デザイン性・架構の力学的安定性の調和をとり、都市に対し開かれた付加価値の高い屋内競技施設を提案する。

(プログラム) ・競技用プールエリア ・サブプールエリア ・観客エリア ・バックヤード ・その他

spool 瀬戸口博美

建物の配置や形状は、糸巻きのように周りを巻き込みながら人が集まり、成長していくイメージからきている。ファブリックスペースやプールの見えるカフェなど、入ってくるどんな人でもプールとの関係性が持て、市民に開かれた憩いの場として、プールを身近に感じることができるようになっている。

Pull Over 和田大典

この建築は波紋と風のイメージからできている。三つに分かれた屋根はそれぞれの機能を持ち、利用者はこの建築の内外を行き来することで競技施設の熱気を感じ、その雰囲気は波紋のように広がっていく。

Grove School 味園将矢

『木を植えるように柱を植える』森の木々の間隔は幹の太さ、枝振りから自らと決定され、全体としては緩やかな境界を持つ多様な空間の集合体となる。森のような小学校で子供たちは自ら自分の場所を見つけ出す。

□小学校

(設計概要) 児童学習環境、周辺環境を配慮し、地域や社会に対して十分な機能を果たす小学校を提案する。

(プログラム) ・教室(各学年3クラス) ・特別教室 ・管理棟室 ・ランチルーム ・図書室 ・体育館 ・プール ・その他

catalyst 花原裕美子

小学校で子どもたちは多様に行動する。そしてここでは誰もが誰かに変化を与える存在となり、誰もが誰かから変化を受ける存在となる。変わることのない建築を「触媒(catalyst)」として、子どもたちが成長してゆく小学校。

Hospitality 丸林美香

この病院では、病院で働く人の動線を効率化しつつ、患者の生活空間としての居住性を考慮した。外来患者が利用する診察室と待合は、トップライトや光庭で採光を確保しつつ看護側から見ても使いやすい室の配置とした。

□都市に立地する病院

(設計概要) 後背人口5万人程度の地域の中核病院の計画。病院建築の計画・設計を都市的なスケールで扱うこと、かつ複雑かつ多様な機能構成と数値的諸条件を建築化していくことが求められた。

(プログラム) 敷地：用途地域を考慮しながら市内に各自設定。面積は10,000〜12,000㎡。規模：一般病床100〜150床(うちハイケアユニット4〜6床を含む)。1床当りの床面積は50〜80㎡。診療科目：内科系と外科系(手術室を確保)の診療科目を含むように各自で設定。その他：外来患者用駐車場

「光のあふれる病院」 木口屋由紀

患者やスタッフの動線、物品の流れ、清潔・不潔の区分などに注意しつつも、快適な空間となるように設計した。外来部では、待合室に設けた光庭によって外の光を感じることができ、待ち時間を気持ちよく過ごせるようにした。

Skip Step 松添愛子

敷地に段差をつけ、各々の特色と機能を付加することで、変化のある散歩道を有する集合住宅を提案した。賑やかな街側から海側へ敷地を下ると木々に覆われた静かな空間へと開け、さらに進むと波音が聞こえ錦江湾と桜島が視界に広がる。

□集合住宅

(設計概要) 水辺に立地する敷地に対する200戸の集合住宅を計画。豊かな居住環境・生活環境を提案する。

(プログラム) ■集合住宅 ・一般家庭用・単身用・高齢者用住戸 計200戸 ■生活支援施設 ■その他 ・魅力的な屋外空間・駐車場

海に立つ集合住宅 野見山周作

敷地の海沿いの一辺に建物を立ち上げることで、眺望の共有をめざした。都市に対してはコミュニティースペースが面し、柔らかい表情を見せる。住居間の間隔をあげることで、桜島へ視線が抜け、全体の圧迫感を弱めている。

Skip Step 松添愛子

敷地に段差をつけ、各々の特色と機能を付加することで、変化のある散歩道を有する集合住宅を提案した。賑やかな街側から海側へ敷地を下ると木々に覆われた静かな空間へと開け、さらに進むと波音が聞こえ錦江湾と桜島が視界に広がる。